遠謀２

三浦　誠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠謀２

【Ｎコード】

Ｎ７９３６Ｕ

【作者名】

三浦　誠

【あらすじ】

未来人によりイージス化された戦艦大和の世界平和確立物語

ばれており、逆に敵国の情報取得はおざなりです。その気になればお話ししている程度の情報は、我々のような素人でも入手できます。」三上も苦々しそうに語っている。
牧野は「うーん。」と唸りながら、ようやく
「それで私に何をしろと。」と言葉を絞り出した。
「我々が三戸工廠長なりを通じて井上次官にお会いできるよう、取り計らって頂きたいのです。」
「井上さんに会われて、どうなさるおつもりか？」
「大和の大改装を我々にやらせて頂きたいとお願いしたいのです。」
「出撃中止を具申されるのではなく。」
「はい、大和は沖縄救援に出撃してもらいたいと思っています。ただ大和には航空攻撃はもとより、陸、海、空、いかなる攻撃も不可能な船となって出撃して欲しいのです。」
「おしゃっておることが、わかりかねます。一体あなたがたは、何者です。攻撃不可能な船とは、どういうことです。」牧野は苛立ちを隠さず、声を荒げた。
「突然のお話ですので、ご理解頂けないのは当たり前だと思います。我々は、あなたと同じ技術者の集団です。ただ我々の持ちます技術をご理解頂くには、時間を要します。でもご覧頂くことは、すぐにでも可能です。具体的には探知能力を飛躍的に向上させます。この探知能力に連動させて、全ての火砲を
装填、照準、発射まで自動化します。」
「自動化？」
「そうです。人手ではなく、全ての操作を機械に委ねます。人はその制御を監視、修正するだけです。電探の探知数値を高速の演算装置に集約し瞬時に火砲操作の信号を出力させその信号によって各火砲の動力機械を制御します。」三上は無表情に戻って語った。

牧野は「ふー。」と息を吐き笑顔を作った。
「面白い話だ。確かにそんな装備の船は攻撃不可能だ。夢物語以上、夢の又夢だ。」
「探知範囲は地球半分の電探、超高速大容量の演算装置、超小型高出力のモーター、駆動に要する無限連鎖のエネルギー源、全てを我々は今現在、保持しています。」
牧野の顔から笑いが消えた。
「信じられん。私をからかってるのかね。それとも他に魂胆ありか？でなければ狂人のたわごととしか思えん。」
「すいません。おしゃるとおり、あなたから見れば狂人のたわごとであろうことはごもっともです。ですが誇張も嘘もありません。で、すぐにご覧頂けると申し上げました。明日にでも可能です。お考えください。義理の妹さんは、転移の進んだ末期癌でした。今妹さんの体に癌細胞は、かけらもありません。手品や魔法でなく、我々の技術でお直ししました。この話を信じて頂く為に。」三上は平静を強調している。
「よしんば、君のいう機器の存在を肯定したとしてもだ、火砲の換装だけでも膨大な金、時間、労力を要するだろう。とても半年足らずでできる話には思えん。やはり絵空事だ。」
「1ヶ月で完了させます。その為の資金、労力共、準備を完了しています。」
「ますます信じられん。まさに手品、魔法でなければ、そんなことは不可能だ。」
「我々の技術を御理解頂くには、時間がかかると申し上げました。おそらく我々の技術は牧野さんの想像を遥かに超えていると思います。それとも、やはり私は狂人に見えるでしょうか？何かご質問頂ければ幸いですが。」
沈黙が流れた。牧野はぐったりした様子でつぶやいた。
「地球半分の探知範囲は有り得ない。」
「お答えします。」初めて大橋が口を開いた。

「御承知のように、光は波動性と粒子性を併せ持っています。粒子である以上質量エネルギーも持っておりますので、電磁波を曲げることは可能ですが、少しの屈曲でも天体程度の質量エネルギーを要します。我々は高空に反射板を置くことで直進電波の方向変換を行い広範囲探知を可能にします。」

「高空に反射板？」

「地球の周回軌道に機器を乗せてしまうのです。ようするに月と同じ極小の衛星にしてしまう訳です。」三上が補足する。再び大橋が

「実際には、この衛星も発信機能を持っていますので、衛星で探知、地上に結果送信も可能です。既に5個の衛星が廻っており、短時間でしたら、小さな望遠鏡でご覧頂くことも可能です。このあたりのことは、理研の仁科博士に問い合わせて頂ければ、驚かれはするでしょうが、可能だとおっしゃると思います

。サイクロトロンじゃなかった粒子加速器で研究をお続けのはずですから。なお21、22号電探に比べ、我々のレーダーじゃない電探の出力は3桁程違っています。解析精度は6桁程細密で鮮明な画像処理が可能です。くどいですが、私も狂人に見えるでしょうか？」

牧野は顔をこすりながら、又つぶやく。

「頭が大混乱です。22号は出力2KWです。あなた方の発信機は2000KW。あぁ大橋さん、敵性語を避けて頂かなくてもいいです。海軍は英語使用OKですから。」

「失礼しました。出力は5MW、5000KWです。解析は6GHz、60億Hzまで可能です。ちなみに機器は掌サイズで、重さは170gです。」

「夢を見てるようだ。夢なら覚めないで欲しい。すぐにでも現物を見てみたいものだ。」

「どうぞ。」大橋は無造作にバックから取り出し机の上に置いた。2000年代の携帯電話を思い起こさせる薄い箱である。三上がそれを、牧野の前に押しやった。牧野は目を見張りながら、恐る恐る手に取った。

「開いてみて下さい。」大橋が促した。
「今は時計表示になっています。一番右上の小さなボタンを押してください。」
牧野は蒼白状態になる。言葉は出てこない。
「今の富士山です。動いている雲も今現在のものです。失礼。」大橋が立ちあがって牧野の横に立つ。牧野に持たせたまま、大橋が操作ボタンを押す。
「今の第三船渠です。」カラー画像だ。小さな画面だが、動く人まではっきり見える。」
「これがレーダー。」牧野は絞り出すようにつぶやく。
「正確には、レーダー機能はこの機器の機能のほんの一部です。通信、撮影、記録、演算、検索、解析、これ一台でこの工廠の事務的作業は全てこなせると思います。失礼。」さらに大橋が操作ボタンを押す。
「現在のテニアンです。もう2～3週間でB29が東京に向けて離陸可能になります。これは衛星からの画像を受信再生しています。」稼働中の舗装機械や米兵の姿が鮮明だ。牧野の目に涙がにじんだ。
「わかりました。あなた方は奇跡を起こしているのだ。そうとしか考えられません。何でもしましょう。いって下さい。」牧野は涙ぐみながらも毅然と言い放った。
「ありがとうございます。艦政本部にレーダーの重要性をいち早く上申された、あなたなら、わかって頂けると思ってました。正直これだけのことを、短時に分かって頂ける方は他にはいらっしゃらない。」三上も顔を崩した。
「まずは明日にでも、自動制御火砲のレプリカをご覧頂きたいと思います。できましたら三戸さんも、御一緒に。」
牧野は一呼吸置き
「今日はこんな時間で三戸中将の御都合が掴めんかも知れません。説明も必要ですし、明日は苦しいと思います。明後日以降でこちらから連絡させていただきたい。それで具体的には、どのような物を

見せて頂けるのでしょう。」
三上が答える。
「わかりました。ご連絡をお待ちします。レプリカは、実装の２５ｍｍ単装機銃を５基程並べ、１／５スケールの無線操縦飛行機を１５機飛ばし、自動制御による撃墜プロセスを確認頂きます。機銃は駆動部を確認頂く為、裸体で仮設置します。魚雷実験部あたりの突堤をお借りできるとありがたいのですが。」
「それでは準備が大変ではありませんか？」牧野は又驚きの表情だ。
「いえ、ご連絡頂いて１時間程度でご覧頂けるよう準備体勢継続でお待ちします。」
「つくづく、すごい人達だ。で、連絡方法はどのように？」
「ＩＴ機と呼んでますが、お手持ちの箱をお預けします。これを押して頂ければ、三上に繋がります。無線機と思って頂ければ結構です。」大橋が操作説明をしながら答える。
「こんなたいそうな物、預かって何かあれば大変ではありませんか？」
「大丈夫です。通信機能以外はオフ状態にしておきます。紛失、破損等されましても、御心配なく。こちらからは、いかようにも連絡させて頂けますので。」大橋のニッコリが、牧野にもうけた。
「わかりました。とにかく度肝を抜かれっぱなしですな。大橋さん、女性のあなたが、こんな知識をどこで学ばれたんですか。」
大橋は三上を見ながら、又ニッコリ
「こつこつ積み上げました。女優さんのように。」
「えっ。」牧野はポカンとした。
「それでは、今日はこのへんで失礼します。」
三上が遮り気味に立ちあがった。
「いや、こちらこそ大変なお話でした。今後もよろしく。で、勤務が１９：００前には終わりますので、今夜は夕食をいかがですか？」
牧野は大橋に向かっていった。
「すいません予定がありまして。又の機会に御馳走になります。」

答えたのは三上だ。
「そうですか。まっ、このご時世、御馳走なんてありませんからな。」牧野がいう。三上が続ける。
「帰りがけに、嫌なお話ですが、レイテは惨敗です。武蔵が沈みます。連合艦隊はほぼ壊滅です。大和はリンガ泊地に帰投後内地に戻ります。」
「そんな。」牧野はがっくりと座りこんだ。
「残念です。失礼します。」
二人はそのまま廊下に出た。門衛の水兵に一礼し、鎮守府庁舎方向に歩きだした。
「やりきれないでしょうね。」大橋が呟く。
「早晩知れることだし、あれだけの人だ、とっくに負け戦は覚悟してるさ。それより、あの旧式端末、みごと当たりだったたね。慧眼だよ。」
「ＩＴシート見せたって、かえって無反応だと思ったの。かけ離れ過ぎよね。」二人は話しながら、細い路地に逸れ、消えていった。西新橋の戸建玄関に、二人は音もなく戻った。
「飯や風呂はどうする？」三上はあくびしながら尋ねる。
「そうね。食事は取り寄せにする。この時代の物じゃ貧し過ぎだわ。そうそう地熱で温まった湯のお風呂、温泉だっけ。今から行ってこようかな。」大橋は気楽そうに答える。
「温泉いいけど、多人数で入るんだぜ。」
「気にしないわ。じゃあね。」大橋だけが、すっと消える。三上は左の６畳間に上がり込む。
「はい、大宮。」
「今いいかい。」
「大丈夫だ。どうだ状況は？」
「とっかかりはＯＫだ。切羽詰まった時代だから裏はあるまい。加奈ちゃんの旧式端末でうまくいったと思う。明後日以降でデモをやる。チームのスタンバイ頼む。」

「いつでもＯＫだ。呉に放り込めばいいんだな。」
「そうだ。よろしくな。」
「彼女はどうだ？」
「今、入浴中。」
「おぉー。」
「ばか、ここにはいないよ。恐らく四国あたり、道後温泉ってやつか。」
「なんだ、つまらん。」
「こっちこそだ、じゃぁな。」
「気をつけてな。」素っ気ない会話であった。
魚雷実験部は本部前の道を南西に進み右に折れる。そのまま北西に海まで直進する。建物は左手に続き、建物が終わって左折すると右は海。向こうに江田島がかすむ。建物端に木製のバリケードが置かれ、水兵が銃を持って１０人程並んでいる。いつもとは違う風景だ。明らかにこれより進入禁止を示している。
すでに三上、大橋、幌付トラック３台、２０人程の男達がデモの準備を終わりかけている。海軍側も三戸、牧野の他、佐官クラスの将校が４人、下士官クラスと思われる男が５人、作業を見つめている。三戸が三上に話しかけている。
「やはり牧野君の話でなければ、一笑に伏しとるところだ。今でも申し訳ないが、ほとんど信じてはおらん。だが彼の技術者としての誠実さは、誰もが認めるところだ。彼が見ろというんだから何かはあるのだろうと思っておる。」
「恐れ入ります。先ほども申し上げましたとおり、私共に私心は毛程もございません。ただ世界に誇れる日本の造船技術を、飛行機ごときに云々されたくない一心でございます。」
「うーん。」三戸は表情を変えない。
「準備できました。」大橋が三上に告げる。
「それでは、ご説明いたします。原色で塗り分けましたヘルキャットのサイズは１／５です。事前に動きを決めて、照準するのではな

いことを確認頂く為、色別に皆さんに動きを指定して頂きます。例えば赤に急降下をさせろとか、緑に雷撃動作をさせろと指示ください。それに合せて２５ｍｍを作動させます。装填は駆動をご覧頂く為、単弾槍にしてございますが、実際にはこの弾槍自体も複式で自動装填します。参考用に１２．７ｃｍ高角砲の自動動作と自動装填の動きもご覧頂きます。それではお願いします。」三上に促され下士官達が模型飛行機に近づき、チームの男達に指示する。ついでに下士官達が模型の材質等を質問している。

「よくできてるなぁー。」何れも感嘆の声を上げている。下士官も技術屋ばかりのようだ。

「始めます。」三上がチームの男達に目配せした。男達は電動のインパクトレンチを手に、模型に駆け寄り、次々とプロペラを廻して、エンジンを始動していく。同じように始動した模型から駆け足で離れ、レンチを置いてＲＣ操縦機を手にする。三上の手が挙がると同時に一機目が滑走を始め、離陸していく。次々と後続がそれに倣う。実に手早く１５機が上空で編隊旋回を始める。

「最初は、発砲せずに各機に自動照準させます。５基の２５ｍｍがそれぞれ同じ目標を追尾しないのを、ご覧ください。」

３ｍ程の間隔を空けて設置された５基の機銃中央後ろに、チームの男が一人、例の携帯電話様の操作機を見ている。ヘルキャットが江田島右方向に離れていき、５ｋｍ程の距離をとって機首をこちらに向け、編隊を崩して速度を上げ、乱舞し始めた。

「始め。」三上の声で突然５基の銃身が、目まぐるしく動き始めた。強烈な速さである。ジージーと微かな音だけがする。「おぉー。」と声が上がった。もちろん軍服の連中からである。

「では、発砲させます。一瞬のことになると思いますので、お見逃しなく。」三上が手をふる。銃身は動きを止め、中央少仰角で静止する。模型機も速度を落とし離れて整列する。見届けた三上が、手を振りおろす。模型機が弾かれたように、一気に加速し、散り散りにこちらに近づく。

「撃て。」三上の一言と同時に２５ｍｍ機銃が吠えた。パンパンパンと５基が各３斉射。一瞬で沈黙した。模型機のほうは、弾け飛んでバラバラと落ちていくもの、垂直に海に突っ込んでいくもの、錐もみにゆらゆらと落ちていくもの、それぞれだが、乱舞していた姿は何処にもない。最後の一機のエンジン音が消えて、静寂に包まれた。声を発する者がいない。軍服の男達は青ざめていた。ややあって、一人の少佐がぽつりと呟く。

「これがあれば、勝てる。」三戸が三上に近づいた。

「誇張も嘘もないことは、確認させてもらった。恐るべき装置だ。君らはいったい、」三上が三戸の言葉を遮る。

「何れ、ご説明は必ずいたします。それよりも一刻も早く大和の改装許可を頂きたい。」

「閣下、彼を信じたいと思います。東京には自分もお伴します。」牧野も二人に近づき言った。他の軍人達は機銃を取り巻き、駆動部を見つめたり、レンチや端末を手に取り、チームの男達を質問責めにしていた。

「ついでといっては何ですが、もう一つお目にかけようと思います。」三上の声に、チームの男達が又動きだした。

「実は、２５ｍｍも１２．７ｃｍも航空機の速度を想定しておりません。」

「どういうことです？」牧野が訊く。

「もっと早いものを撃ち落とすことを想定しています。例えば噴進飛行機とか、噴進弾、砲弾そのものとか。」三上が答える。

「噴進というと、ドイツが開発したジェットとかロケットの類ですか？」

「そうです。我国もドイツの供与で、菊花や桜花があると思いますが、細かく申し上げますとターボファン式というやつで、アメリカの開発物も含めて、ジェット推進本来の速度を出せるものではありません。今ご覧頂きますのは、サイズは１／５ですが、速度は音速の３倍ほどになります。」

「ほんとうですか？いやいやいかん。あなたがたのやられることは、桁はずれだった。」
三上の説明に牧野は戸惑いながらも、納得の表情を見せている。
「セットできたようですので、まずジェットから飛ばしてみます。」
すでにコンクリート舗装路に置かれた模型ジェット機を、士官達が取り囲んでいる。チームの男達が説明しながら、始動する旨を伝え、どいて欲しいといっている。この機の始動は内臓セル。全員が離れたとたん自前で始動。ブォンという低い音から一気にキーンという金属音に変えて、カタパルト射出よりはるかに勢いよく離陸した。そのまま鳶ヶ鼻方向に進路をとり、直進して見えなくなった。
「１２．７ｃｍ一発でいきます。」三上が三戸、牧野に伝えた。すぐ鳶ヶ鼻方向から目まぐるしく進路、高度をかえながら、鎮守府方向に、超音速でジェット機が戻ってきた。
「ロックオン。」　「撃て。」１２．７ｃｍの傍の男の声と同時に三上も叫んだ。ボンという発射音と一瞬のずれの後、ジェット機は砕け散った。今度は軍人達がはしゃいで歓声を上げた。
「最後は少しお手間をかけます。串山の対空砲陣地から秋月方向に高角砲を2，3発撃って頂く訳にはまいりませんか。」三上の依頼に「どうだ。」と三戸が副官らしき下士官に尋ねた。
「訓練発令が出ておりますので、問題ないかと。」
「よし、発射指令。」「はっ。」三戸の声に下士官は、後ろの建物角に走った。木箱に納められた受話器を取り上げ、話始める。
「防空指揮所、大島中佐を、こちら本部工廠長付杉谷大尉。」ややあって。
「杉谷です。はい命令であります。はい、命令、発工廠長、宛防空指揮官、速やかに秋月方向に向け着弾信管にて、４０高角砲3発を発射せよ。以上であります。よろしく。」振り返った大尉が、三戸、牧野に向け頷いた。
「くるぞ。」牧野が三上を見ていった。
「ありがとうございます。」三上の声が終わった瞬間、串山に白煙

が上がりボン、ボン、ボンと砲声がした。一瞬の間で、同じように１２．７ｃｍが火をふいた。同じタイミングで前方の上空で砲弾が炸裂した。
「本当に砲弾が撃ち落とされたわけか。」
三戸が唸るように言い、牧野は無言だった。
「はい。」三上はゆっくり答えた。又静寂である。
「ちょっと頭を整理せねば、考えがついてきておらん。だが早々に井上次官に報告する。少し待ってくれ。」三戸は苦笑いを浮かべながら言った。
「ありがとうございます。何卒よろしく。」
三上の声が終わった瞬間、けたたましくサイレンが鳴った。続いて建物横のスピーカーから大音量が流れた。
「方位０８０東能美島方面より敵機進入、高

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7936u/

遠謀２

2011年7月12日03時30分発行